

初期医学教育における パストウールの意義

大村敏郎

一八八八年十一月十四日、パストゥール研究所が開設された。当初この施設は狂犬病の予防治療所であり、感染症の研究センターであり、微生物学の教育センターであった。この研究所はその後多数の優れた業績をあげつづけ、最近では AIDS の研究でも名声を博するなど世界の第一線を維持している。

百年目に当るこの機会にルイ・パストゥール (Louis Pasteur, 1822—95) のことをふり返り、医学生教育における彼の意義について考えてみたい。

私は昨年、二つの大学で講義の際にパストゥールに関するところで新しい試みを行った。

「医史学」として講義する慶応義塾大学では三年生が対象で、十三時間あり選択科目である。パストゥールとコッ

ホを語る時、昨年春の日本細菌学会会長を務められた慶応微生物の齊藤和久教授に出席していただき、八十分を私が講義して先生には十分コメントをいただく方式をとった。

これは医史学を古い時代の医学の世界に追いやらず、現代につなげる上に大いに役立つ、学生に強い印象を与え、現に成功した。また別の時間には内科・外科・病理などの領域の先生の出席を得ることが出来た。このように医史学の講義に臨床教育のグラウンド・ラウンドの試みを取入れたのである。出席される先生は必ず何か医史学に関する書物に目を通して出席されるし、それぞれの専門領域の先生と共同で講義を構成するのは楽しいことである。学生にとつては、異なる観点からの意見をきき較べることが出来るだけでなく、教師との出合いを早期に持つてることによってお互いに親しみが湧き、同時に講義全体の活性を充めることが出来たと考えている。

もう一つの試みは東京女子医大での医学史的な見地からの「医学概論」の時間である。一年生を対象で十一時間あり必修科目である。ジェンナーとパストゥール（この二人は入れ代るように生れてきた）を取上げた時、八十枚のス

ライドを使用した。前もって予告せずに最後の数分で感想を書くことを課して、どう受けとめられたかを探ることにした。

スライドはパストゥールの生地ドルの町を訪ねる旅からはじまり、その生涯を語り、生家の博物館から最初の研究であった酒石酸の結晶の模型、細菌の自然発生説を否定するのに使われた白鳥の頸のフラスコを紹介した。現代のフランスの牛乳パックに記入されているパストゥール式低温殺菌法、ワインやビールの醸酵、カイコの病気、一八七〇年代の病原細菌の発見、ワクチンのヒントになったニワトリコレラ、炭疽病の野外実験、そして狂犬病の予防と生涯を通しての研究の発展を語った。

提出された六十四通の感想からパストゥールに関することを項目に分けて拾ってみると、

一、パストゥールが医者でないのに医学に深く貢献したこと（十八件）。パストゥールの個々の研究は知っていても医者でないことは知らなかったというのが多かった。医学と医者の世界だけに目を注ぎがちな若い医学生にとつて、関連分野を含めて視野を拡げる必要があることを感じ

たようである。

二、パストゥールの研究に対する熱意と姿勢（十五件）。病にくじけぬ努力も注目されていた。

三、菌の自然発生説の否定（十四件）。これは高校の生物でおなじみであるが、同じ人物が狂犬病の予防に関与したことは知らぬ者の方が多かった。

四、免疫学の祖としての評価（十四件）。五、狂犬病対策への貢献（十一件）。六、細菌学の父としての評価（八件）。七、国境・宗派を越えて病人を救う思想（五件）。八、研究の領域の広さ（五件）。九、充実した生涯（三件）。十、パストゥール研究所の創立（三件）。その他十六件、合計一一二件であった。他にパストゥールに触れていないもの（六通）。

高校における生物と保健体育から医学の専門教育への間には大きなギャップがある。これを埋めるために医学部の低学年で「医学序論」や「医学概論」あるいは「医史学」という講義が行われている。しかし、知らない人物が知らない時代に知らない研究に夢中になった成功物語を聞かされても学生はついていけない。古い方から歴史を下ってき

て、やっと知っている人物に巡りあってほっとするのがパストゥールである。その業績を何も知らなかったと明記した者が一人いた。それ以前の人物ではヒポクラテス、ジュナー、杉田玄白あたりが知られている程度である。

医学とは離れた研究から次第に医療に近づき、細菌学と免疫学をうちたてたパストゥールは、初期医学生教育にもっと利用されてもよい人物だと考える。

パストゥール研究所は今年百年記念行事をいろいろ用意するであろう。注目していきたい。

（慶應義塾大学医史学研究室）